

宇都宮市教育委員会埋蔵文化財報告書第2集

竹下浅間山古墳

昭和51年3月

宇都宮市教育委員会

序 文

文化財の意義・重要性については、いまさら申すまでもありませんが、埋蔵文化財についても、近年の宅地や工場用地の造成、農地改良などの土地開発が契機となって、「開発と破壊」というきわめて現代的な問題として、クローズ・アップされてまいりました。

宇都宮市においても、約300ヵ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されておりますが、都市計画の急速な進行とともに、埋蔵文化財の調査確認及び記録保存が刻下の急務となっております。

このたび、発掘調査を実施した竹下浅間山古墳は鬼怒川左岸段丘に沿って点在する前方後円墳のひとつで墳頂部に浅間神社が祭られていたところから、竹下浅間山と名付けられたもので、昭和48年、所有者の農地拡張工事の際に石室が露呈したことから、同年3月24日から4月7日にわたり、宇都宮大学名誉教授の辰巳四郎先生に調査団長となっていただいて緊急発掘調査を実施したものです。

調査の結果、頭椎太刀・鉾・勾玉など多数の出土品をはじめ予想以上の成果をあげ、ここに栃木県教育委員会指導主事の常川秀夫先生のご尽力により本報告書としてまとめられることになりました。

最後になりましたが、発掘調査にあられたかたがたをはじめ、多くの協力者のご尽力に対し厚くお礼申しあげるとともに、本書が歴史研究と文化財保護の資料として広く活用されますことを期待して発刊の言葉とします。

昭和51年3月

宇都宮市教育委員会

教育長 立 入 隼 人

例 言

- 本報告書は宇都宮市竹下町にある前方後円墳の発掘調査報告書である。
- 本古墳の発掘調査は宇都宮市教育委員会が主体となり、同委員会が調査費用の全額を負担し、昭和48年3月24日～4月7日までの15日間実施した。
- 本調査は辰己四郎（宇都宮大学名誉教授）が全体の指導をし、常川秀夫（県教委、文化課指導主事）が担当し、宇都宮大学考古学研究会の協力を得て実施した。
- 本書の執筆、整図、写真作成は常川秀夫が行なった。
- 本古墳の出土品は地元の竹下町にある清原公民館に保管し、展示してある。

目 次

1. 発掘調査にいたる経過	1
2. 遺跡の地理的環境と付近の遺跡	2
3. 墳 丘	4
4. 墓道および内部主体	8
5. 出土遺物	12
1 遺物の出土状況	12
2 遺 物	13
6. 考 察	22

挿 図 目 次

第 1 図 竹下浅間山古墳と付近の遺跡	3
第 2 図 周濠内トレンチ断面図	4
第 3 図 墳丘全測図	5
第 4 図 墳丘推定復元図	6
第 5 図 墓道および内部主体実測図	9
第 6 図 内部主体実測図	11
第 7 図 遺物出土状態実測図	12
第 8 図 頭椎大刀実測図	14
第 9 図 刀子, 鉾, 鉄鏃実測図	17
第 10 図 馬具類(轡)実測図	18
第 11 図 馬具類(鬘珠, 辻金具, 鞍, 鞍具)実測図	19
第 12 図 装飾品および土器類実測図	21

1. 発掘調査にいたる経過

鬼怒川左岸台地は従来から数多くの古墳、集落跡があることが知られていたが、昭和48年3月、畑地造成中、古墳の石室らしきものが露呈したとの報告により、県教委常川指導主事の指導で現地調査を実施したところ、すでに墳丘はすべて削平され、石室も天井石及び上部側壁は消失した状態であった。

地主の樋山権太郎氏は古墳とは考えておらず、墳頂部には以前から小さな祠が浅間神社と名付け祭られてあって、墳丘の前方部から後円部に向かって参道がつけられていたため、先祖の人達が富士山に似せて山を作ったと考えていたようである。そこで、神社は古墳の南側に移して、お祭りすることにして墳丘を削平したところ、石室が露呈したので市教委に連絡したとのことである。

現地調査の結果、現存している石室と残っていると思われる周濠だけでも調査する必要があるとの結論に達したため、宇都宮市教育委員会が調査主体者となり、辰己四郎先生(宇都宮大学名誉教授)と県教委常川指導主事に調査の担当を依頼し、昭和48年3月24日～3月30日までの7日間の予定で発掘調査を実施することになった。

発掘調査が進むにつれ、墳丘南側の周濠が思っていたより残っていたことと石室外の塞閉石の上部から墓道の底面にかけて頭椎大刀、鉾、馬具などが出土したため、調査期間を延長し4月7日まで、延べ15日間にわたり発掘調査を行なったものである。

調査組織は次のとおりである。

調査団長 辰 己 四 郎(宇都宮大学名誉教授)

調査員 常 川 秀 夫(栃木県教育委員会文化課)

協力者 直 井 茂 吉(宇都宮市文化財調査員)

樋 山 権 太 郎(地主)

宇都宮大学考古学研究会

事務局 宇都宮市教育委員会社会教育課

課長 檜原貞國、文化振興係長 佐藤六夫(47年)、吉田利幸(48年)

係職員 山本治夫、(47年)南雄次郎、(48年)

宇都宮市清原公民館

館長 福田一四、副館長 枝野一二、書記 横山悦子

2. 遺跡の地理的環境と付近の遺跡

本遺跡は宇都宮市の中心街より東へ約8km、竹下町1101番地に所在する。宇都宮市の東部は本県最大の河川である鬼怒川が南下しており、現在の河幅は約600mであるが、氾濫原の幅は約3kmに及ぶ広大なもので、一面水田地帯となっている。この鬼怒川の氾濫原の西側は田原段丘面、東側は宝積寺段丘面と呼ばれる洪積台地で、この台地上には集落跡、古墳等の多くの遺跡の存在が知られている。

本遺跡は、氏家町から二宮町まで続く宝積寺段丘面の西端に位置している。この台地は関東ローマ層で厚く覆われたものであるが、西縁は鬼怒川の浸蝕により鋭く切り立った崖となっており、竹下町の飛山城での崖の比高は約25mを測する。

さらに、本遺跡の周辺を細かく見ると、飛山城(1)のある部分の台地が西へ大きく突き出し、切り立った崖になっていることに気づく。これは鬼怒川の蛇行運動により、北の道場宿付近の台地を激しく抉り取った水流は、飛山城の所で大きく西流して行ったためにできた地形と考えられる。しかしある時期には鬼怒川の水の一部は南へ直進し、台地を開析し、鑓山^{カサ}〜滝谷〜高間木を通り五行川の氾濫原に抜けたと考えられる。

東は開析谷、北〜西は段丘崖という自然の要害を利用して清原氏により築城(鎌倉時代)されたのが飛山城であり、本浅間山古墳は谷を挟んで東の対岸に位置することになる。

谷の幅は約300mであり、道場宿街道が西端を走り、東側は水田となっている。この水田面と浅間山古墳のある段丘上との比高は約10mである。台地上は一面の平坦地になっており、東西の巾は1.5kmと広大なもので、戦時中は清原飛行場として利用され、現在は清原工業団地として開発が進められている地域である。

次に古墳周辺の遺跡について見ると、本古墳の北700m地点に全長27m、後円部径10m、高さは前方部、後円部共に4.5mの上竹下古墳(3)があり、さらに北東300mの清原中央小学校の東には直径20m、高さ6mの円墳、大塚古墳(4)がある。これらの古墳の周辺には奈良時代を中心とする集落跡の大塚古墳横(5)大塚古墳南(6)阿婆寺北(7)の3遺跡があるが連続するものと考えられ、本古墳と関連のある大集落と思われる。

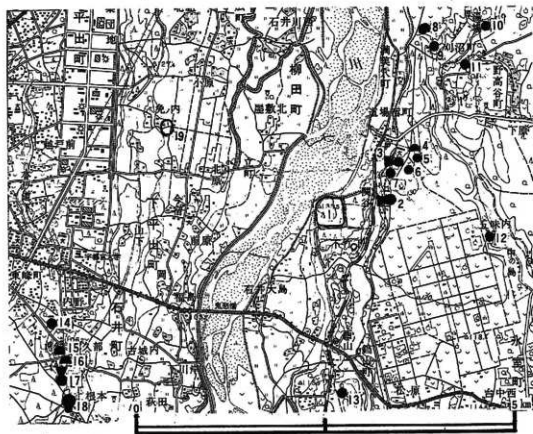
これらの遺跡群の北1.5kmの地点、刈沼のある谷の周辺には縄文および土師集落跡の刈沼地前(8)、平安時代と考えられる北屋敷(9)、奈良時代と考えられる野高寺(10)の3遺跡がある。近くには美美穴古墳群があり、現在円墳3基が残っている。規模はいずれも直径約5m、高さ1m〜1.5mの小円墳である。

本古墳の東〜南にかけて広がる台地上には遺跡が少なく、台地の東段丘崖上に奈良時代集落跡の五味内遺跡(12)、本古墳から南へ2.5kmの地点に奈良時代の集落跡の鑓山遺跡(仮称、13)があるだけである。

最後に、6の考察のところで後述する東山道の駅家と関連のある鬼怒川の対岸上にある遺跡について述べることにする。まず石井町の田原段丘面上にある遺跡であるが、集落跡としては奈良時代と考えら

れる志峰東遺跡¹⁵があり、その南には三ヶ月神社を祀る直径3.8m、高さ3.5mの円墳、三ヶ月神社古墳¹⁶がある。これに続いて三ヶ月神社南古墳群(仮称、16)があり、いずれも円墳で最大は直径2.4m、高さ3m、他の3基は直径1.6m~1.8m、高さは約1.5mの円墳である。ここから小さな谷を渡り南へ行くと前方部を北に向けた前方後円墳の久部浅間山古墳¹⁷があり、さらに南へ進んだ段丘上には久部台古墳群¹⁸があり、主墳は前方部を南に向け、前方部が低く、退化した形態をとる牛塚型の前方向後円墳で全長は4.6mである。他は横穴式石室は旧地表下に入るもので、昭和50年2月に県教育委員会が新国道4号線の建設に伴い3基を調査している。

19の平出の免の内にある木ノ川であるが、これは小字名であり、やはり、考察の項で述べるが、金坂清則氏が比定している、衣川の駅家の地点である。



- 1 飛山城跡 2 竹下浅間山古墳 3 上竹下古墳 4 大塚古墳 5 大横古墳
- 6 大塚古墳南 7 同慶寺北 8 満美穴古墳群 9 北屋敷 10 刈沼地前
- 11 野高寺 12 五味内 13 鑑山 14 志峰東 15 三ヶ月神社古墳
- 16 三ヶ月神社南古墳群 17 久部浅間山古墳 18 久部台古墳群 19 木ノ川

第1図 竹下浅間山古墳と付近の遺跡

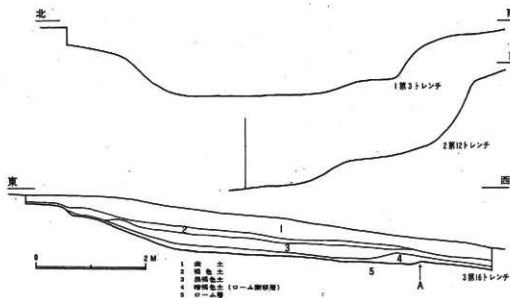
3. 墳 丘

本墳は鬼怒川の左岸段丘上の雑木と孟宗竹の林に囲まれ、保存状態のよい古墳であったということであったが、調査時点では削平された畑地の中央に硬砂岩の大きな一枚石の奥壁の頭が見える状態であった。

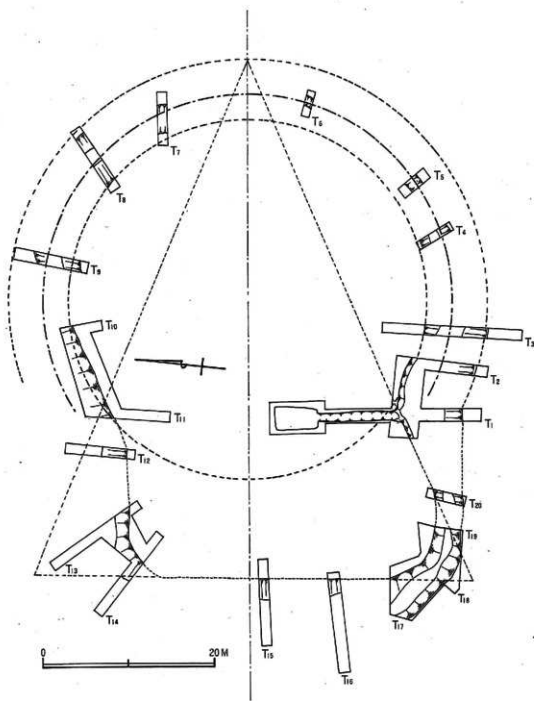
本墳の地形上の立地は、東側が高く、西及び北に向って緩傾斜してゆくため、墳丘の土量を西へ北へ押出して平坦化していた。このため東側はローム面をカットした状態であり後円部の周溝が確認できる状態であったので、前方部を中心に周溝調査を行ない、墳丘形を求めることにした。

まず、墓道があると思われる地点に長さ20m、巾1.5mで第1トレンチを設定し、続いて東側に巾1.5mで第2、第3トレンチを入れた。この地域が最もよく周溝が残っている部分であり、第3トレンチ(第2図1)で見ると周溝幅は6.2m、深さは1.2m、周溝外壁は約40°の傾斜度をもって周溝底に落ち込むのに対し、周溝内壁は約55°の急傾斜度で周溝底に落ち込み、この部分で幅約60cmの平坦面を作り、再び15°の緩傾斜で約15cm程深くなり周溝底の中央部へと続く。この第1～第3トレンチの調査により、この地域が墳丘南側の後円部から前方部にかけての部分、タビレ部であり、このタビレ部分に墓道が接続することが判明した。

これに対し、前方部は南西隅角部に向うに従って周溝幅も狭く、深さも浅くなる。第20トレンチでは周溝幅約3m、深さ70cm、第17～19トレンチの隅角部では周溝幅約4m、深さ50～60cmとなる。前方部前縁の周溝は第16トレンチ(第2図3)でわかるように、前方部前縁から約25cmの部



第2図 周溝内トレンチ断面図



第 3 图 墳丘全測図

分は約4°の傾斜度で深さ20cmまで落込み、若干の平坦面を作り、さらに幅1.6mまでは約2°の傾斜度で落込み、若干の傾斜度をもつ平坦面へと続いている。

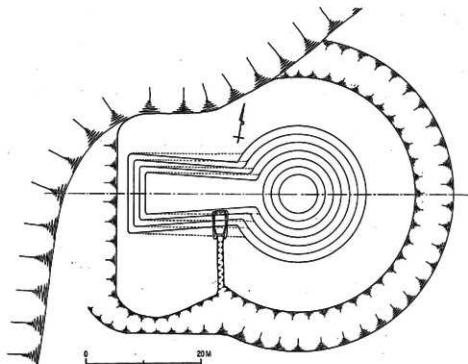
しかし、周濠外縁への立上りは認められず、そのまま鬼怒川の段丘崖へと続いてしまう。あえて、立上りとするならば前方部前縁から6.5mの地点(A点)に、わずかに認められる程度である。

前方部北側縁部から後円部にかけては第9～第14トレンチまでを入れて調査した結果、墳丘からの落込みと、それに続く平坦面は確認できたが、周濠外縁への立上りを確認することはできなかった。つまり、周濠外縁と考えられる地点は孟宗竹の繁る急斜面の崖となってしまう周濠はなかったとの結論に達した。

墳丘の復元形について。

T₁～T₂₀までのトレンチを設定し、周濠調査を行なった結果、次の事柄が判明した。

- 1) 本墳は鬼怒川の左岸段丘の崖ぎりぎりの地域を濠地しているため、東側の後円部周濠から南側の前方部側縁周濠は、しっかりとした規模で周濠が掘られているのに対し、西側の前方部前縁と北側の前方部～クビレ部にかけては、地形的制約から周濠を作らなかったと思われる。
- 2) このため、墳丘の北側は不規則な形状をしているが、南側は平面規格にもとずいて構築していることが認められている。後円部のT₄～T₇の各トレンチは、削平され周濠底の一部しか残っていない



第4図 墳丘推定復元図

が、これらを含め後円部の各トレンチの周濠から墳丘形を推定復元すると、後円部は点0を中心にして直径41m前後の規模であり、その外側に幅6~7m深さ1.2~1.5mの周濠が回っていたと考えられる。

次に前方部であるが、前方部長は11.5mと短い、前方部の巾は墳丘の主軸線から南西隅角部までを測ると21.5mとなり、後円部径を上回る規模となる。後期の前方後円墳の特色をもつ設計である。また周濠外縁は墳丘の主軸線に平行するような形態をとっているため、隅角部に行くに従い周濠は狭くなる。このため、全体の周濠形は鍵穴状を呈する。

- 3) 周濠調査から本墳を復元してみると、墳丘の主軸の方向がN-84°-Eと若干北に寄るが、ほぼ前方部を真西へ向け、全長52.5m、後円部径41mで鍵穴状の周濠をもつ後期型の前方後円墳であることが理解できる。しかし、昭和47年の遺跡調査時の報告では全長42m、後円部径24m、高さ3m、前方部幅8m~10m、高さ1.5mの前期型の前方後円墳となっており、地元民の話しでも周濠より、かなり内側に後円部の裾部があったと証言している点を考えると、本墳は東から南へかけて周濠を掘ることにより、広い基域を設け、その中に全長42mの前方後円墳を構築したと考えられる。とすると、基壇面は後円部で幅約8.5m、前方部前縁で幅約2mとなる。

以上の事柄をもとにして本墳を推定復元したものが第4図である。後円部については問題ないが、前方部については周濠の形状のように前方部前縁に行くに従い広がる(実線)のか、南北両側縁が広がらず平行になるのか(点線)不明であるが、石室の位置を考えると、旧地表下に入り込む形式の石室であっても玄室部までは墳丘下にあると思われる。とすると前方部は点線で示すような前方部側縁が平行となる形式であると考えられるが断定はできない。

4. 墓道および内部主体

本墳の内部主体は胴張りをもつ横穴式石室で、位置は墳丘基壇面のクビレ部にあり、墳丘の主軸線と直交するようにし、南に開口させている。また石室は天井石付近までが旧地表下に入り込む形態をとっているため、地表上へ通じさせる墓道が必要となってくる。

墓道は羨門からクビレ部の周縁底面に通じるように掘られており、羨門部とクビレ部での底面のレベルには差はなく、中間付近でやや高くなるが水平に掘られていると言える。

墓道の長さは4.8m、方向はN6°Wで南北を指している。墓道の断面形は \cap 形に掘られている。調査で確認できたのは旧表土下にある赤褐色を呈する今市軽石層からであるが、石室の部分の土層から旧表土は約40cmと確認されているので、それらを踏えて断面形を推定復元すると墓道の上幅は約145cm、底面幅45cm、深さ130cmとなる。

墓道で注目すべき点は、クビレ部の部分にある柱穴群である。調査当初、黒い円形の落ち込みがあるのは知っていたが、松などの木の根の跡であろうと考えていた。掘ってみると垂直に落ち込んでおり柱穴群であることが明確になったのである。

第5図に示すように、柱穴群はA、Bの2柱穴列に分れると考えられる。A列の柱穴は直径20cm～40cm、深さ20cm～60cmであるのに対し、B列は直径20cm前後、深さ20cm～30cmでA列の方が規模が大きい。以上のことから墓道を中心にして基壇上に東西に並ぶAの横列と、墓道を塞ぐようにして周縁内に立てられたBの横列があったと考えられる。

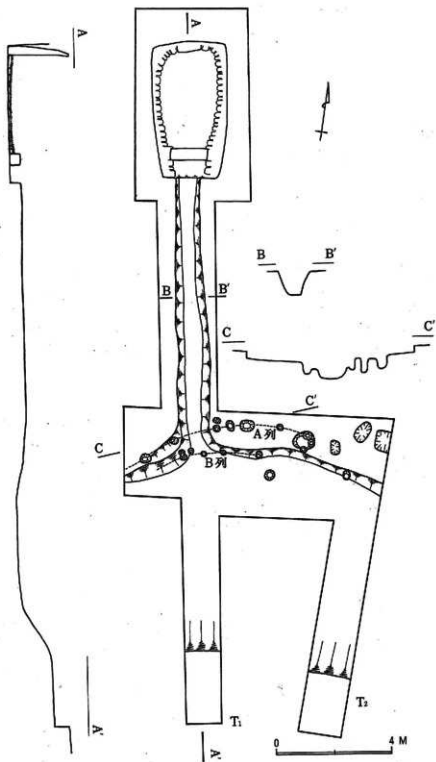
内部主体は前述したように、土壌を掘り石室の天井石付近までを旧地表下に入れるような構築法を用いている。

土壌の構築法であるが、調査時点での協議の結果、石室上部は破壊されているが将来復元するという結論であったため、側壁の河原石を外し土壌の規模を確認する調査は行なっていない。従って第6図に示す土壌の平面プランの実線は土壌床面上1.5mの地点(土壌の上面)の平面形を示したものである。この地点での規模は長さ4.8m、奥壁付近の最大幅2.6m、前壁幅1.9mで、墓道まで含めての平面形は、ゆるやかな胴張りをもつ惣形となる。

土壌の深さは、旧地表下1.54mである。次に土壌の側断面であるが、側壁を垂直に掘り下げた場合とへの字状(底面に行くに従って広がる)になる場合が考えられるが、本墳の場合は垂直に掘り下げた場合を考えると側壁の原石と土壌の壁との間隔が狭すぎるので、への字状に掘り下げ河原石を2列にして覆上げていると考えられる。

石室の構築法 本石室は胴張りを有する両袖型の横穴式石室である。石室の規模は全長4.4m、主軸線の方向はS4°Eで南に開口させている。

支室は全長3.4m、幅は奥壁の部分で1.55m、奥壁から1.6mの地点が最大幅で1.95m、羨門部



第5図 墓道および内部主体実測図

で1.15mである。天井石は不整形の硬砂岩を5枚を使用しており、最大147cm×90cm、最小のもので110cm×65cmである。うち中央部の2枚は石室内に落込んでおり、他はブルドーザーにより運ばれていて、天井部の構築法は不明である。

奥壁は高さ175cm(床面から)最大巾118cmの大形の硬砂岩を一枚立て、その両側を河原石が狭み込みようにして鏡石を固定させている。側壁は河原石を2列に並べ小口積みにしている。河原石の最大のもは80cm×30cm、大形のもので50cm×30cmである。河原石間にはローム土が築き固められて充填されているため安定感がある。壁の持送りは奥壁付近で高さ1mに対し35cm、玄門付近で高さ1.15mに対し45cm内傾させており、持送りを強くしてアーチ形に河原石を積上げていると思われる。

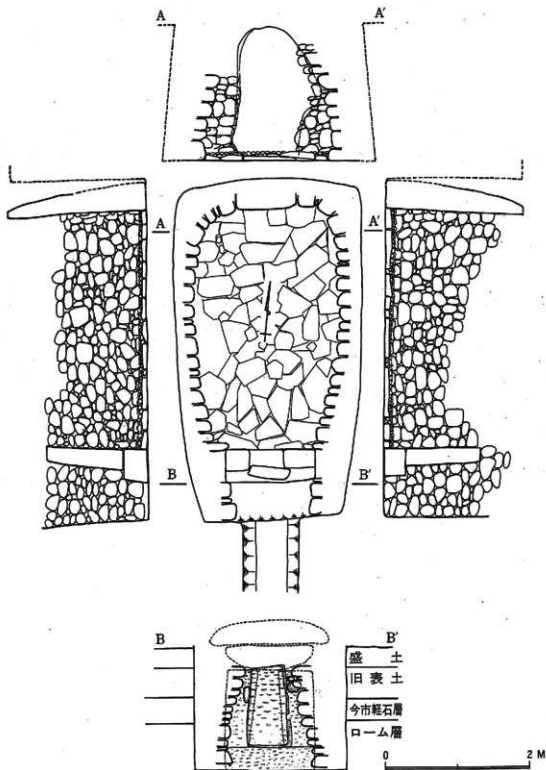
床面は地山のローム面上に軟らかい粘板岩質の扁平な板状のものを全面に張っており、その上に奥壁寄りの部分では直径10cm内外の円礫と荒い砂を敷き、玄門付近では河原石を並べ、その空隙に砂礫を敷詰めする方法を用いている。床面のレベルは軟質粘板岩を敷いた面で見ると、奥壁部と玄門部は同レベルであるが、中央部が約10cm低くなっている。

玄門部 間仕切石、袖石、扉石に軟質凝灰岩、^土箱石に硬砂岩を使用して構築している。間仕切石は長さ125cm、巾44cm、厚さ33cmの一本の切石を用いており、東西両端は約5cm位側壁の河原石間に入込む形式をとり、その上に袖石を乗せている。東袖石は高さ104cm、下幅45cm、上幅50cm、厚さ25cmの切石、西袖石は高さ106cm、下幅32cm、上幅44cm、厚さ29cmの切石を用いている。この両袖石の間の空間が玄門ということになり、下幅50cm、上幅は、東袖石が5cm、西袖石が15cmそれぞれ内傾するため30cmとなる。高さは105cm前後と思われる。

袖石の上に置かれる^土箱石は不整形の硬砂岩の割石を用いており、規模は長さ120cm、幅27cm、厚さ30cmである。玄門の外側の間仕切石の上には扉石が置かれている。規模は高さ114cm、上幅45cm、下幅55cm、厚さ約15cmである。

羨道部 本来の目的から外れ玄門を閉塞するため施設として使用される。規模は長さ56cm、幅116cmである。側壁は玄室の河原石より、やや小形の河原石を小口積にしており、壁の持送りは、東壁で高さ140cmに対し28cm、西壁で高さ130cmに対し19cmを測る。

玄門間仕切石の上面と墓道底面は同一レベルであり、羨道床面はそれより31cm低く構築されている。床面上16cmの厚さまではローム土、今市軽土、黒色土の混入土を築き固めた層があり、その上に扁平な河原石を敷き空隙はローム土、黒色土の混入土を充填させている。この河原石の上面は墓道床面と同一レベルであり、この面が実際の羨道床面と考えられる。この扁平な河原石の上部は扉石を閉塞するための河原石を充填している。河原石間には黒色土が入り込んでいるが、これは築固めたような様子はなく自然地覆と考えられる。



第 6 图 内部主体実測图

5. 出土遺物

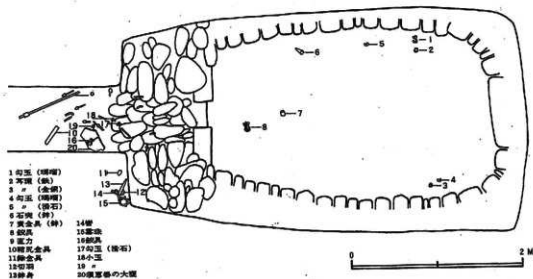
1. 遺物の出土状況

今回の調査では全く予期もしない所から頭椎大刀、馬具類などが出土し驚かされている。つまり、羨道から墓道にかけての部分进行调查する目的で黒色土を掘り下げてみると、墓道の上面やや西寄りの部分から鉢を石室の方へ向けて直刀1本が出土し、その東40cmの地点から金銅張りの頭椎大刀の柄頭と鞘尻金具、さらに羨道の東壁上からは馬具の轡、鬘珠と鉢身、大刀金具の切羽が出土したのである。柄頭と鞘尻金具は燃されたため金色から茶褐色に変色しており、鞘尻金具の中に入り込んでいる木部も焦げて黒く炭化している。

さらに出土状態で特色づけるのは、鉢の石突と責め金具は石室内の床面上から出土し、鉢身は石室外から出土している点である。同じように、鉄芯の耳飾り、珊瑚製勾玉、滑石製勾玉、ガラス製小玉なども石室内の床面上と石室外の墓道付近から出土している。

これらの特色について考えてみると、本墳は追葬がなされたことは明白であり、追葬の際石室内は清掃され、前被葬者の副葬品は石室外に運び出されたのであるが、一部は石室内にそのまま残されたと考えられる。石室外に出された副葬品は墓前祭的なものを行なうために燃されていることは確実である。

それが、何時、何処で行なわれたかという問題であるが、副葬品が石室外に出された直後、つまり石室が開口している時点であるとする、轡、鉢身が出土している地点であり、追葬が終り、河原石で閉塞



第7図 遺物出土状態実測図

し、さらに黒色土で覆った時点で行なわれたとすれば、直刀の出土している石室前面の地点であろうと思われる。

2. 出土遺物

頭椎大刀 頭椎とは柄頭の形が株、瘤、拳のような塊状を呈しているもので名付けられたものである。頭椎大刀は古墳時代の後期～終末期の古墳から出土し、華やかな金銅張りの金具で外装されており、儀仗用の大刀とされている。

柄頭は長径9.8cm、巾6.4cm、高さ6.6cmを測する。製法は厚さ1mmの銅板を打ち出し法により銚目を浮出させたもの2枚を銚目中央で接合させ、金メッキをしたものである。銚目は銚目4本、横銚目が左右2本ずつで計4本である。両側面中央には^{かぎとめしき}懸通穴があけてあるが縁金具は消失している。この大きな柄頭と直刀の^{きんご}茎とを固定させるために柄頭の中に麻布を入れる例が多いようであるが、本例は燃されているため検出されていない。

切羽 は柄頭の下部に装着させる倒卵形の板状の金具である。金銅張りで外径7.3cm×4.7cm、内径4.7cm×2.7cmで、板の厚さは1.3mmである。

縁金具は柄頭と柄間を^{つぎあ}連接させるための金具である。柄頭に接する部分は大きく、外径で4.7cm×2.9cm、柄間に接する部分は小さく4cm×2.2cmを測する。幅は1.7cm、下幅1cmである。

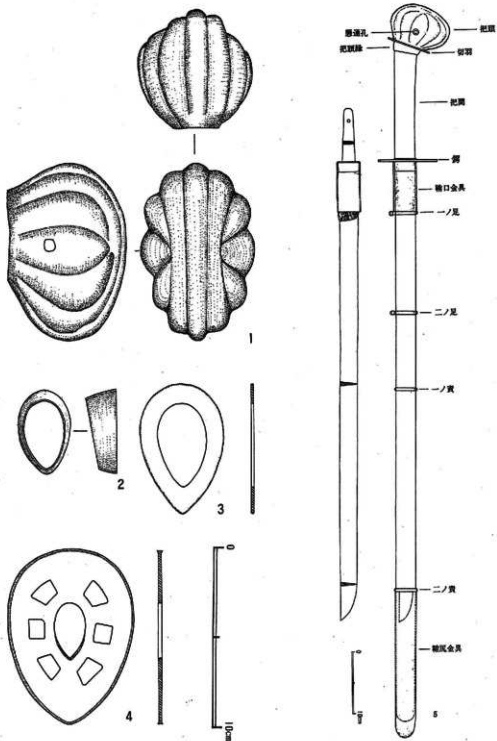
鍔 倒卵形で六窓の透かしをもつ金銅製の鍔で保存状態は良好である。長径9.8cm、短径7cm、厚さは1.5mmであるが覆輪部は厚くしており2.6mmを測する。意は方形および台形にタガネで打抜いたと思われる。

鞘口金具 直刀に装着されたまま出土している。厚さ0.6mmの銅板を倒卵形に曲げ、背の部分で接合させている。長さは7.9cm、断面形は3.7cm×2.25cmを測し、表面には文様は認められない。

鞘口金具の内側に^{つぎ}紐が入込んでいる。厚さ0.9mmの銅板を倒卵形に曲げたもので、長さ2cm、断面外径は3.4cm×2cmである。紐は鍔を固定させ、刀身と鞘を安定させるための金具であり、本例は紐が2cm鞘口金具の中に入り込み、その地点で鞘の木部と接するように作られている。所謂舌込式である。

鞘尻金具 金銅板を2枚接合させた丸尻のもので、長さは2.36cm、断面は倒卵形で3.3cm×2cmを測する。鞘木も残存しており、鞘木は麻の荒布を一重に巻き、鞘尻金具の中に挿入されている。鞘尻金具の口の部分の木部は燃えて炭化しており、その口の部分から4.5cmまでは直刀の鍔を入れるため削がれている。鞘木と鞘尻金具の端との間には2.6cmの空間がある。

直刀 全長84.6cm、身の長さは関の部分に鞘口金具があるため不明瞭であるが65cm前後と思われる。身巾は鞘口金具の部分で2.9cm、鉾付近で2.7cm、棟幅は7.5mmである。作りは平棟平作り、鍔はフクラ鍔である。茎は長さ約10cm、中央部での巾は1.9cm、厚さは上面で5mm、下面で2mmであり、断面形は逆台形となる。茎尻は丸尻形、目釘穴は茎尻から2cmのところ1穴あけており直径4mmを測



第 8 圖 頭椎大刀突測圖

する。

頭椎大刀の復元形 大刀の各部の名称と、本墳出土の復元形を示したものが第8図である。本例は大刀を腰にさげるための紐を通す足金具、鞘木をおさえるための貫金具、^{（1）} 柄頭、足筒、貫筒の部分に着装される金具は発見されていない。頭椎大刀については後藤守一氏が詳しく調べられており、全国出土の大刀から検討し、柄頭の長径を1とすると、拵の全長はその1.3倍に近く、柄を1とすれば鞘は4、つまり柄は全長の5分の1の長さになるのが一般的な拵であると述べている。

本例について考えてみると、柄頭の長径は9.8cmであるので拵の全長は127.4cmとなる。

また、直刀の身の長さと同質金具から鞘の長さを推定すると、98cmとなり、全長は122.5cm前後ということになる。

鉾（第9図3）鉾身は石室外、石突と貫金具は石室床面から出土している。

鉾身は全長25.6cm、身の断面は正角形を呈し、袋部に拵する部分で一辺1.8cmを測する。

袋部は鉄板を丸く曲げて作っており、接合部は明瞭に分る。口径は2.8cm（外径）、口縁から1cmの所に直径3mm、長さ8mmの目釘が1個打たれている。

石突は、長さ8.2cm、口径2.5cm（外径）で円錐形を呈し、やはり鉄板を曲げて作られている。

貫金具は、厚さ1.5mmの鉄板を円形に曲げて作られており、口径は2.8cm（外径）、長さは2.9cmを測する。

刀子、2本出土している。第9図1は茎尻が欠損している。身長は15.8cm、関の部分での身幅は2.5cm、棟幅は4mmであり、銚はアクラ銚である。銚は厚さ2mmの鉄板を断面倒卵形に曲げ2.3cm×1.8cmを測し、幅は1.1cmある。茎は幅1.4cm、厚さは上面5mm、下面4mmで断面形は逆台形を呈する。同図2は小形刀子で銚と茎尻の部分に欠損している。関幅は1.5cm、刀部は関から銚に向って内曲し、関から2.5cmのところでは身幅1.3cm、棟幅3mmを測する。茎は関の部分で幅1.3cm、関から1.5cmの部で9mmを測し、断面は逆台形を呈する。

鉄鏃 大部分の鉄鏃は石室外の閉塞石上の黒色土中から墓道底面上にかけて出土している。鏃身だけ数えると19本が出土しているが、それよりは、かなり上回る鏃が腐葬されていたと思われる。

鉄鏃を分類すると3形式の鉄鏃になる。第9図4～10は^{（2）} 鋭頭被笠三角形形式と呼ばれるものである。全長は4で15.5cm、10で13.5cm位と思われる。身は三角形を呈し（9、10は長三角形）断面は片丸造りにしている。4～7には^{（3）} 腹挟りが認められる。長い寛被をもっており4では長さ10cm、幅5mm、厚さ3mmで断面形は長方形を呈し、茎と接する部分に鏃と呼ばれる突起がある。茎はいずれも欠損しているが4で3cm位と思われ、断面は円形である。

11～14は^{（4）} 鈍頭被笠前式で全長は11で15.8cm、13で13.5cm、身の断面は片丸であり、11、12、14は寛被に移る部分に関をもつが13は関がなく連続して寛被に移る。茎は11で4.5cm、13で4.2cmで三角形形式のものよりは長くなる。

15～16は鉄筥被片箭式で16は全長19.8cmと長大であり、筥被は幅4mm、厚さ3mmの長方形を畳し、細身に作られ、茎も7.5cmとさらに長く作られており、刺突力に秀れている。

身は小形刀子のように作られ片方に刃をもち、刃から筥被にかけては関がなく連続している。

3形式の鉄鏃とも全長が長く、細身であり、刺突力に秀れた実戦用のものであり、また古墳時代の鉄鏃としては時代の下るものと思われる。

馬具類 今回出土した馬具類は轡、雲珠、辻金具、鞍、鞍具、鞍の鞍板金具である。これらの馬具類を見ると、異った種類の金具の出土はないので、副葬されていた馬具は1種類であったと考えられる。

(1) 轡 (第10図1)

轡は馬の口の中に入る銜、銜と手綱を連結させる引手、銜と面繫の革帯とを連結させるための鏡板および立間に分けられる。轡は鉄製であるが立間と面繫の革帯を連結させるための金具には鉄地金鋼張のものを使用している。銜は2連式であり、直径9mmの丸棒の両端に、鉄環をつけ、全長は14.6cmを測する。鏡板には直径8mmの鉄棒を楕円形に曲げた鉄環を用いており、大きさは長径7.4cm、短径6cmである。立間は2.6cm×1.4cm厚さ4mmの鉄板を鉄環に結合させて作られている。

立間と面繫の革帯を連結させる金具には長さ7.3cm、巾1.7cmの鉄地金鋼張のものを用いている。金具の上端の部分は巾1.1cmと狭くし、立間の孔の中を通して連結し、面繫の革帯とは鉄留めにより固定させている。鉄は3個使用し、その間隔は2.5cmである。

引手は左右で長さを異にしており、左は15.8cm、右は13.6cmを測する。棒の部分は外側は直線であるが、内側は丸味をもたせ、中央部が太くなるように作られている。引手壺は手綱の紐を結びやすくするため外側に曲げられており、その角度は約120°である。

(2) 雲珠 (第11図1)

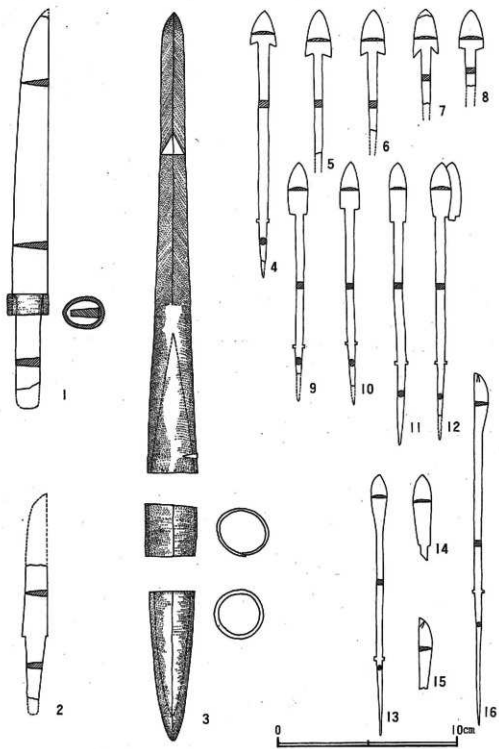
雲珠とは馬の尻繫の革帯の交点につけられる飾金具である。鉄地金鋼張で脚を含めた全幅は12.8cm、体の部分の幅は8.8cm、高さ3.8cmで、体の上には高さ1.4cm、直径1.4cmの宝珠形の紐がつき、紐の周囲には別作りの径3.4cmの八花の座板をつけている。脚は8脚であり、幅は約2cm、長さは約2cmで、各脚に1個ずつ直径9mm高さ5mmの断面が半円形の筋板がついている。また脚の付根の部分には幅3.5mm、厚さ2mmの金具が、雲珠と革帯を固定させるためにつけられている。

(3) 辻金具 (第11図2)

馬の顔の部分につけられる革帯(面繫)の交叉点を固定させるための金具である。鉄地金鋼張で雲珠を小形にしたもので、脚は4脚である。全幅は8.8cm、体の幅は5.6cm、高さは2.4cmで、その上に径3.2cm、厚さ1.2mmの7花形の座板と高さ1.2cm、幅1.4cmの宝珠形の紐がついている。

(4) 鞍 (第11図3)

鞍金具の一部で、前輪、後輪につけられ、胸繫、尻繫の革帯を鞍に結ぶための止金具である。鞍具の部分は直径7mmの鉄製の丸棒を用いて鍵穴状にし、横軸には厚さ1mm、直径3.3cmの円形の座金を通して長い足金具が巻きつけられている。足金具の先端は鞍橋の木質部と鞍具を固定させるために直角に



第9图 刀子，铍，铁剑突测图

曲げられている。座金の裏には木目痕が付着しているので、座金から足金具の曲部までが鞍橋の木質部の厚さと思われる。とすると厚さは約3.7cmを測ることになる。

(5.) 絞具 (第11図4.5)

革帯を止めるためのバックルの役目をする金具である。4は大形の絞具で長さ9cm、最大幅5.4cmで直径6.5mmの鉄棒を曲げて作っている。刺金には直径6mmの鉄棒を用い、絞具の横軸に巻き付け可動できるようにしている。5は直形4mmの鉄棒を用いており、長さ6cm、最大幅4.4cmを測る。刺金があったかは不明である。

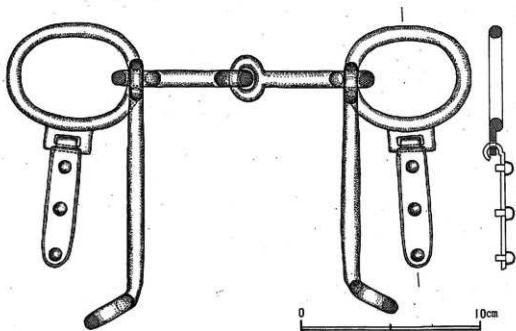
(6.) 紋板金具 (6)

木製の籠の上端に取付けられ、鞍の厩木から下がる力革、鎖と接続させるものである。鉤は2本ずつ打たれ、釘の周囲には木質がよく残っている。先端は内側に曲っており木質部に食い込むように作られている。

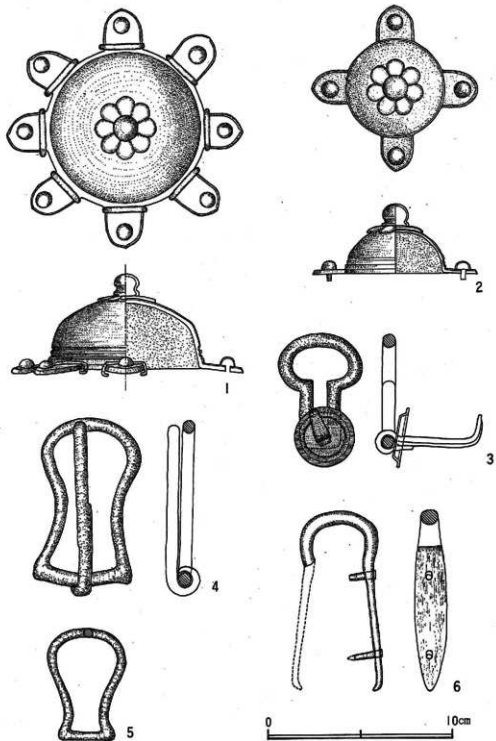
(7.) 装身具

本墳からの出土品は馬、手などに着装する勾玉、切子玉、丸玉と耳環、腕輪である銅網である。

勾玉、紅瑪瑙製のもの4個(1~4)と滑石製のもの2個(5~6)が出土している。瑪瑙製のもは材質もあまりよくなく、仕上も荒いようである。大きさは長径3.7cm~3cmでコの字状呈し、7世紀型の勾玉と呼ばれているものである。滑石製のもは、瑪瑙のものより丸味をおびている。材質が軟らかいため、隣接している管玉、丸玉との玉磨れにより孔の部分が丸く窪み、薄くなっている。



第10図 馬具類・響実測図



第11图 馬具類実測图

切子玉(12)、水晶製で高さ18.3mm、最大幅は中央部で13.2mmを測る。孔は上面は中心部に径3.2mmで開いているが下面は右に大きく寄っており径1.2mmである。

丸玉(13, 14)、石製2個と土製1個が出土している。13は高さ8.7mm、直径1cmで黄味をおびた白色、14は高さ8.3cm、直径1cmで黒褐色を呈し共に石製である。

小玉 ガラス製で、大きさは直径が4.5mm~3mm、厚さは3mm前後で色調はコバルトと青味がかつた緑のもので総数46個出土している。

耳環 3種類、4個が出土している。7は金銅製で大きさは2.5cm×2.3cmで縦長、環の断面も6mm×4mmの縦長の楕円形を呈している。8は金銅製であったと思われるが、銅芯だけとなり緑青がふいた状態である。大きさは3.2cm×2.9cmの縦長で環の断面は直径7mmの円形である。9、10は鉄芯だけで錆が吹出して原形を知るのには困難であるが推定形は3.6cm×3.2cmの縦長で、環の断面は6mm前後の円形と思われる。

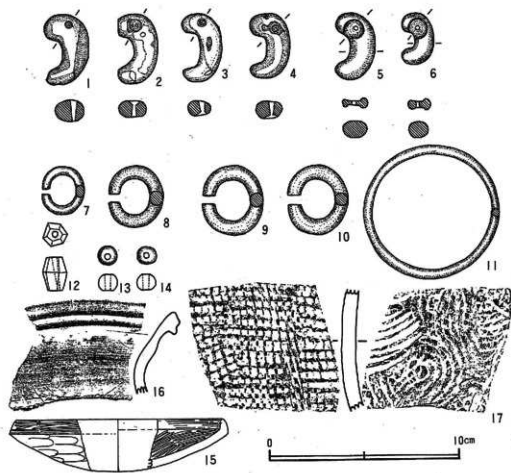
銅削 全面緑青が吹出している。外径7cmの円形で、環の断面は4mmの円形を呈する

土器類 土師器環、口縁部の外面は段がなくなり寛磨きされ、内面は横ナデである。体部の外面は寛磨きされ、内面は寛磨きされている。破片であるが丸底の環と思われ、口縁の段はなくなり、短かいなど新しい様相を示し、鬼高期の末~真間期のものであろう。

須臾器蓋、16と17は同一個体である。2は口縁で外面は横ナデで整形され口唇部に凸帯がまわっている。内面は横ナデである。15は体部片で外面には格子状の叩き目、内面は青海波痕がはっきりと認められる。色は灰色である。土器の出土地点は石室近くの墓道上からである。

(1) 後藤 守一 日本古代文化研究 上古時代鉄器の年代研究 河出書店 昭17

(2) 〃 〃 〃 頭椎大刀に就て



第12图 装饰品, 土器类插图

6. 考 察

本古墳は、すでに墳丘は削平され消失していたが、周濠及び内部主体の調査と、出土遺物から多くの特徴的な事柄が判明したので、これについて述べることにする。

墳丘形 本古墳は鬼怒川の左岸段丘崖上にあり、全長5.25m、後円部径4.1mの自然地形を利用して広い基壇面を作り、その中に全長4.2m、後円部径2.4m、前方部巾8m~10m、高さは後円部3m、前方部1.5mで前方部を西に向けて構築されていたと推定される。

ここで問題になるのは、本古墳が極端に段丘の崖際に寄せて構築されているため、基壇面が不整形であり、周濠も前方部前縁から北クビレ部にかけては省略されている点である。

本墳の場合は東~南にかけては広大な平地があるので、地形的制約のためとは考えられない。とすると、考えられるのは第1点として、労力の省力化のために横穴式石室の正面となる墳丘の南側と、それに続く後円部には立派な周濠を掘り、北クビレ部付近の崖に落すようにし、裏側になる墳丘の北側~前方部前縁にかけての部分と極端に省略した。第2点としては、後述するように、東山道が本古墳のある段丘と、飛山城のある段丘との間にある谷(現在の道場宿街道)を通り、本古墳の北で段丘を登り、大塚古墳と土師の大集落に通じていた可能性もあり、その場合、東山道を往来する人々の視覚的效果をねらい崖の下からもよく見えるように極端に崖際に寄せたとも考えられる。

内部主体 本古墳の場合の特色は、①横穴式石室が旧地表下にありクビレ部に向って開口し、石室の主軸線と墳丘の主軸線は直交すること。②石室の平面プランは短い狭道をもつ兩袖型の横穴式石室で支室の側壁は円弧を描く胴張型であることの2点をあげることができる。

横穴式石室を伴う前方後円墳の基本的平面プランは後円部の中心点に奥壁を置き、墳丘と石室の主軸線が直交するように設計されたものと考えられる。しかし、時代が下るにつれ石室の規模が縮小することにもよるが奥壁は後円部の中心点から離れるようになるのであろう。

本古墳のように石室と墳丘の主軸が直交しかつ、石室が前方部にあると考えられるものには二ツ室塚⁽¹⁾(湯津上村湯津上)と御鷲山古墳(南河内町薬師寺)があるが、クビレ部にあるものは本県では初現と思われる。南関東では我孫子古墳群⁽²⁾(千葉県東葛飾部)の日立精機1号墳、2号墳、第四小学校古墳、が知られ、2号墳は全長4.8mの前方後円墳ないし、前方後方墳で切石の石室は旧地表下を約90cm掘り込で作られており、前庭部には柱穴様のピットが14発見しており注目されるものである。また築造時期は出土土器から7世紀後半と考えられている。

本県の場合、クビレ部に横穴式石室をもつ例として、大和久震平氏が指摘⁽³⁾しているように牛塚型の前方後円墳に多いことが注目される点で、この古墳は前方部の退化形式としてとらえることができ、築造時期は古墳時代の終末期と考えられる。発掘調査例は飯塚2号墳(小山市飯塚)がある。

③胴張りのある横穴式石室とは支室の平面形が三味線の胴、または徳利のように側壁が弧を描き外側

に張出す形式のものであり、本県では本古墳の他15遺跡の古墳が知られており南は飯塚古墳群⁽⁴⁾(小山市)から北は鏡室塚(黒羽町北境)まで広く分布が認められている。埼玉県東松山市周辺に見られる典型的な胴張を有するものは藤江2号墳⁽⁵⁾(鹿沼市藤江町)で復室形式をとり、奥室長1.2m、中央幅1.15mを測するものであるが、その他は若干の胴張を示す程度のもので多く、本古墳の場合は胴が張った徳利形の石室の好例である。また本墳に類似したものは新田古墳⁽⁶⁾(高根沢町)である。直径15m、高さ1mの円墳で横穴式石室は全長4.12m、玄室長3.12m、中央部の最大幅1.43m、側壁は河原石の小口積み、奥壁と側壁の一部間仕切石、裾石、扉石には凝灰岩の切石を使用し、羨道は1mと短く、墓道は上幅90cm、底幅40cm、深1.2mで周濠まで続くと思われる。本墳との類似点は石室の規模は若干新田古墳の方が小さいが、玄門部に凝灰岩の切石を使用していることで注目される。

他県における胴張をもつ古墳の研究では、福島県の柴田俊彰氏⁽⁷⁾が県内の20例について研究されている。それによると立地は山地の傾斜地の地山を掘り込んで構築する山寄せ式が多く13例ある。墳形は前方後円墳1、円墳18、積石塚1、石室は側壁に切石を使用しているもの3基で、他は自然石、割石の乱石積みで河原石の小口積みは皆無である。玄門部の間仕切石、裾石、閉塞石に切石を使用する例が福島盆地に集中する。構築年代は福島県内での初現は7世紀代に入ってからであり、8世紀代に入っても構築されたようである。

また金井塚良一氏⁽⁸⁾は埼玉県の中心地域である東松山市周辺の古墳の調査例から構式石室をもつ古墳を編年され、次の表のようにまとめている。

形式	構築法	石室平面形	石室と奥室比	奥室と前室比	奥室と羨道比	玄室巾指数	遺物	その他の特徴	時期
第Ⅰ形式	切石乱石積	長方形単室	4:3		4:1	40	埴輪	石室の位置が高い。	6C後半
第Ⅱ形式	載石切組積	"	4:3		4:1	50	"	袖なしもある。	6C終末
第Ⅲ形式	"	両袖胴張復室	2:1	2:1	2:1	70	須恵器	巨石使用	7C初頭
第Ⅳ形式	"	"	2:1	2:1	2:1	80	"	典型的な胴張	7C半は前後
第Ⅴ形式	"	胴張単室	3:2		3:1	60~70	"	半地下式	7C後半中頃以後
本古墳	河原石小口積	両袖胴張単室	約4:3		約4:1	57	"	"	7C後半以後

第Ⅲ形式で胴張り形の石室が出現し、石室の構築も発達し巨石を使用されると指摘している。また、この段階で埴輪は使用されなくなり、須恵器が出現することも注目される。

石室が旧地表下に入り込む古墳は本県の終末期の古墳に多く見られる。詳細は上大曾古墳群(二宮町

上大曾)⁽⁹⁾で述べているので省略する。

出土遺物 本古墳からは、頭椎大刀、馬具など多くの遺物が出土しているが、ここでは特に注目される頭椎大刀について述べることにする。

本県からの出土例は筆者の知りうる範囲では戦前において3例⁽¹⁰⁾戦後2例である。戦前出土例は①足利公園古墳から2口出土している。1口は柄頭は無銚目式で長径8.7cm、銚は長径8.6cmで六窓様式全長1110cm。他の1口は、柄頭は銚目式で長径9.4cm、銚は八窓様式で長径9.3cm、全長103cmのものである。その他に唐草文鏡、銀象嵌の鞍橋、銅鏡2個が出土している。②真岡市根本字西浦出土。柄頭は銚目式で長径8.4cmのもので形は倒卵形というより扁円形に近く退化様式とされている。③田沼町より出土したもので、普通の様式と異なり主頭大刀の柄頭に似たものとされている。戦後の出土は本古墳と昭和51年1月20日付けの新聞で前沢輝政氏により発表された栃木市新井町鹿島神社跡から明治時代出土したもので、柄頭は長径6cmである。

頭椎大刀は戦前において後藤守一氏が詳しく研究されている。それによると、頭椎大刀は古墳時代中期末から後期にかけての古墳から出土し、特に後期末の出土が多く、絶対年代では飛鳥時代以後に求めてよい。しかし奈良時代式墳墓からの出土例はないので奈良時代に入って絶えたとされている。また出土地域については西日本に乏しく、東国に多く、近畿地方は零に等しい。頭椎大刀を必要とした部族が関東地方に多く占拠していたかも知れない。物部氏の占拠地とされる遠江、駿河地方に出土例が多いのはこれ(軍事集団)を物語るかも知れない。と述べている。

また桐原健氏は古代学研究56号(S39)頭椎大刀佩用者の性格の中で次のように述べている。頭椎大刀には7世紀の所産、東日本に分布、儀仗用の大刀、備化工人による製作という4つの特徴がある。頭椎大刀を90%出土している東日本を県別にすると、愛知1、静岡7、神奈川2、東京1、千葉4、埼玉1、茨城3、長野13、群馬7、栃木2、福島3、宮城1、国別にすると東海道では尾張になく三河から、東山道では美濃になく信濃から始まっている。すなわち大化元年の東国司派遣で示された東国八道のみに出土する。7世紀の時点では大和朝廷としては早急に在地豪族を懐柔させなければならない地域である。

また、出土地点については信濃に限ったことかも知れないが古代東山道の道筋に位置していると述べられている。両氏の研究で本古墳との関連上、注目したいのは頭椎大刀年代であるが、本墳出土のものは長径9.8cmと大形であり、銚目の数も多く最も発展した段階の柄頭と考えられ、時代は7世紀中葉～8世紀に入るまでの時期を考えられること。また信濃においては東山道の道筋に位置しており、本県においても足利公園古墳と本古墳は東山道の関連が強いことである。

東山道 延喜式に記載されている東山道の駅の下野国は足利、三鴨、田部、衣川、新田、磐上、黒川の7駅である。これらの駅のうち本古墳と関連性のある衣川駅～新田駅までを考えてみたい。衣川駅については従来は宇都宮市石井町付近と考えられてきた。最近前沢輝政氏⁽¹¹⁾は同駅を石井の中でも根

本の浅間山古墳群の地域を大化前代からの歴史的環境、鬼怒川の河岸地としての交通の立地から考えて比定し、ここから鬼怒川を渡り鑑山にて北上し、本古墳の北にある大塚を経て五行川を渡り氏家町の熟田の地に達するルートを提唱し、また金坂清則氏¹²は衣川の駅を上平出町木ノ川に比定し、対岸にある大塚古墳を渡河の目標物として鬼怒川を渡り大塚を経て南郡須町歴久保に比定される新田駅家にいたる説を提唱されている。

次に筆者なりに衣川駅家について考えてみると、石井町の根本から久部にかけては前方後円墳を含む多くの古墳が存在し、その中の久部台古墳群は昭和50年2月に県教委が発掘調査を実施しており、円墳3基は河原石小積み横穴式石室で、大部分旧地表下に入るものであり、前方後円墳は周濠の一部だけ調査しているが全長46mの牛塚型の古墳で時代は本古墳と同時期である。また付近には奈良時代の集落跡である志路寮東遺跡があり駅家のあった可能性は考えられる地域である。これに対し、木ノ川については付近に古墳、集落跡は見られないので、本古墳が築造された時点(7世紀中葉~8世紀)では駅家の置かれた可能性は少ないように思われる。とすると鬼怒川を渡る場合流れに直交するように最短距離をとると考えられるので鑑山付近に達し、北上して本古墳のある地域にいたるルートに妥当性があるように思われる。

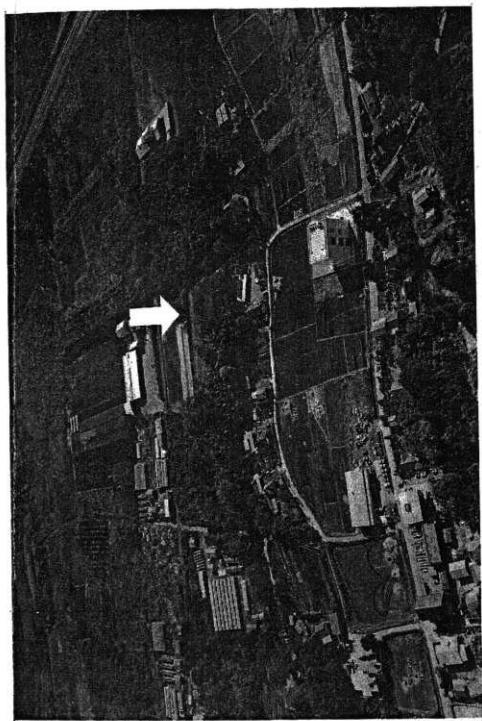
最後に、想像の域を脱しえない考え方であるが、本古墳が前方後円墳としては最終末のものであり、頭椎大刀を被葬者がもっていたことは、軍事面に関連の強い豪族であったと同時に東山道の要所を押えていた力のある豪族であったと考えられる。この被葬者が下野国最大の河川である鬼怒川の渡河地点を押えていた人間であったと考えられるが、このことが正しいとすると、渡河地点は本古墳の南2kmの鑑山に求めるより、飛山城のある鬼怒川に突出した段丘崖の北側の地点が適切となる。

今後、鬼怒川の兩岸地域の遺跡、地名調査をしなくてはならないが、左岸の渡岸地点は飛山城のある地域が断崖であるので南の鑑山付近、北の道場宿付近の2地点にしぼられる。とすると西岸の渡河地点は南流する鬼怒川と直交する地点、鑑山-石井町久部、道場宿-平石町木ノ川の2ルートが考えられる。駅家については従来から言われている石井付近と金坂清則氏の提唱する木ノ川の2地域にしぼられている。しかし鬼怒川の対岸の本古墳を含めた地域を想定することも不可能ではない。その第1点として前方後円墳2基、円墳1基があり、土師器、須恵器を伴う連続する3集落跡があること。第2点として田郡駅家(金坂説をとり、多功城付近)から本古墳までは鬼怒川を直交する距離3kmを含めると約1.7kmとなり、延喜式にある駅家の間隔30里(後世の5里)に一致することである。

参 考 文 献

- (1) 山越 茂、二ツ室塚、栃木県教育委員会 昭50
- (2) 東大文学部考古学研究室、我孫子古墳群、我孫子町教委 昭44
- (3) 大和久巖平、塚 静夫、栃木県の考古学、古川弘文館 昭47

- (4) 大和久義平, 飯塚古墳群, 小山市教育委員会 昭45
- (5) 堀 勝夫, 藤江古墳群, 鹿沼市教育委員会 昭39
- (6) 大和久義平, 台新田古墳, 高根沢町教育委員会 昭42
- (7) 柴田俊彰, 福島考古第16号, 福島県考古学会 昭50
- (8) 金井塚良一, 柏崎古墳群, 考古学資料刊行会 昭43
- (9) 常川秀夫, 上大曾古墳群, 二宮町教育委員会 昭49
- (10) 後藤守一, 日本古代文化研究, 河出書房 昭17
- (11) 前沢輝政, 下野の古代史(下), 有峰書店 昭50
- (12) 金坂清則, 福井大学教育学部紀要Ⅱ, 下野国府・田郡馬家とこの間の東山道, 社会科学25号 昭50



手前（下側）にある森が飛山城跡のある台地、水田となつていゝ谷を挟んで対岸に竹下関山古墳の石室（矢印）だけが見える。